

## ECCOとイギリス史研究の新しい地平

中野 忠（社会科学総合学術院教授）

古い時代の文献を必要なときにいつでも身近に閲覧できればどんなにすばらしいことだろうか。外国の歴史を研究する大半の人はこんな夢を抱くだろうが、近世イギリスの社会・経済史、都市史を研究する私もその一人だった。18世紀の刊行史料に関して言えば、この夢は、大英図書館を中心にイギリス国内・国外の主要な図書館が所蔵する18世紀の刊行文献約50万点のうち20万タイトルを選び、マイクロフィルムにして複製・販売するという1980年代に進められたプロジェクトにより、一部実現されることになった。この複製シリーズは日本でも注目され、本学を含めたいくつかの有力大学図書館で購入された。日本にいながら貴重な文献を自由に閲覧し複写できるようになったことは、18世紀の研究者にとって画期的な出来事だったといつてよい。

だが私自身、このマイクロフィルムにはお世話になった一人なのだが、実際に利用するとなると煩瑣なことも少なくなかった。読みたいと思う文献を、今、ここで、見ることができるもっと有効な方法はないものか。マイクロフィルム化された文献のうちから約15万タイトル、3300万ページ分を選んでデジタル化した膨大な18世紀文献集オンラインECCOは、まさにこの夢を実現するものである。コンピュータに単語を打ち込むだけで、それに関連した文献がすぐに検索できるだけでなく、文献そのものの全文を即座に画面上で見ることができるのである。大げさに言えば、私にとって、それは狭い研究室や自宅の書斎に大英図書館の貴重本室が引っ越してきたに等しいとさえ言える体験である。

これは確かに誇張した表現であろう。結局のところ、これはヴァーチャルな図書館でしかない。いつでも大英図書館に通って、同時代人も手にした書物の現物を貴重本室のあのゆったりとしたデスクでひもとくことのできる人にとっては、これは無用な長物でしかないかもしれない。だがこのオンライン図書館には、デジタル情報のもつ一般

的な優位性を別にしても、図書館通いをする人には享受できない利便性もいくつか備わっている。正直、私はせいぜいこの半年ほど前のトライアルの期間からこのデータベースを常用し始めたばかりであり、「初心者」にすぎない。以下ではその経験を交えて、ECCOのごく初歩的な利用方法や利点を紹介してみよう。

ログインすると最初に表れるのはBasic Researchの画面である。検索する言葉を入れる空欄の横に、キーワード、著者、タイトル、および全文full textという4つの「検索タイプsearch type」を選ぶ欄がある。キーワード検索は、著者、書名、章・節にこの言葉が使われている本を検索する方法であり、一番基本的な検索方法といえる。このデータベースがすごいのは、全文検索の機能、つまり検索する単語が、著者名やタイトル名だけでなく、テキストそのものの中に含まれているすべての文献をリストアップできることである。そのうちの一つの文献を開くと、search this work という欄に検索した言葉が出てくるページ（イメージ）番号の一覧があり、番号をクリックするとその言葉がハイライトされたページが表れる。ある言葉がどんなテキストに、どれ位の頻度で、どのようなコンテキストで用いられるかを調べることは、言語、文学、思想など人文科学の幅広い分野で行われる基本的研究手法の一つだが、ECCOは人手だけでは途方もない時間がかかるこの作業を簡単にこなす強力な助っ人となりうる。

とはいえ、全文検索から始めるのは賢明な検索方法ではあるまい。例えば、18世紀の「公共圏」をめぐる論議で鍵となる“public”(公的)という言葉を検索してみると、『*紳士ランダル氏のロンドン周遊、または1週間のお戯れ、1776年*』というタイトルの(私の知らない)本を筆頭に、84493タイトルもの本がリストアップされる。public は18世紀には publickとも綴られた。Advanced Search にあるファジー検索を使うと、このような綴りの相違を無視した12万タイトルを

超える検索結果が得られる。これを8つある「主題別分野」のうちの「社会科学」に絞ってみても、23000件ほどのタイトルが残る。結局、この検索では、「公的」という形容詞がいかに18世紀の文献でふつうに用いられる言葉であったかが明らかになったとしても、多すぎて特定の文献に行き着くことができない。絞り込んだ検索をするには、「キーワード」「著者」その他を利用することになる。

例えば、当時の社会統計学者カフーンPatrick Colquhounを著者名で検索すると、21件ヒットする。同じ著者の著作は大英図書館のカタログには33タイトルあるが、チェックしてみると主要なものはほぼすべてECCOに収められていることがわかる。そのうえ、『海軍倉庫の詐取、横領、略奪の実態とその原因についての一般的見解』のような、大英図書館にはないタイトルのものもECCOには収録されている。検索結果には著者名、書名の下に書誌を示すFull Citationという項目も付けられているが、これを参照すると、この本がマンチェスターのジョン・リーランド図書館所蔵のものであることが判明する。

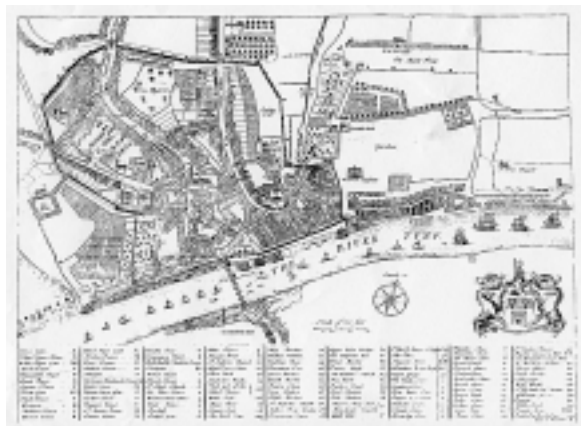
Full Citationの横にはさらに、目次eTable of Contentsと図版リストList of Illustrationsという検索機能もついている。とくに、デジタル化にあたって多くが新たに付け加えられたと思われる図版リストには様々な利用価値がある。例えば、次の図は、私が18世紀イギリスの教育について調べているときに出会った、紳士淑女の振る舞いについての手引書からの挿絵である。また、18世紀イギ



紳士のお辞儀  
*The polite academy, or school of behaviour for young gentlemen and ladies,...*  
 London, 1762, より

リスではたくさんの都市の歴史が書かれたが、そこにはたいてい当時の都市プランが載せられている。図版リストをクリックすれば、次の図のような、都市史研究に欠くことのできない古地図を簡単に手に入れることができる。図版リストには絵ばかりでなく、人名録や家計図、あるいは統計表なども加えられている。そのなかには18世紀の社会・経済史研究にとって有益な資料となるものも少なくない。

これらは私の個人的関心からみたECCOの利用方法のほんの単純な数例にすぎない。この膨大なデジタル・データは、とりわけわれわれ外国の研究者に、18世紀イギリス研究の新しい可能性を提示してくれている。だがどのようにその地平を切り拓いていくかは、研究者の今後の工夫と努力にかかっている。私事にわたって恐縮だが、早稲田大学を拠点とした18世紀イギリスの都市史、社会経済史に関する共同研究に対し、今年度から3年間の科学研究費が与えられることになった。日本で最初にECCOを導入した早稲田大学でこの研究を続けられることに、喜びと、またいくばくかの責任を感じている。



18世紀前半のニューカスル

Bourne, Henry. *The history of Newcastle upon Tyne: or, the ancient and present state of that town.* By the late Henry Bourne, ... Newcastle upon Tyne, 1736より。